

甲南大学の海外留学プログラム

— 学内国際交流から長期留学まで Hop! Step! Jump! —

International Exchange Programs at Konan University:

Our Hop! Step! Jump! Model

From on-Campus Exchange to Full-Term Study Abroad

甲南大学学長補佐・国際言語文化センター教授 伊庭 緑

IBA Midori

(Councillor to the President

Professor, Institute for Language and Culture, Konan University)

キーワード：段階別留学プログラム、学内国際交流、海外留学

1. はじめに

甲南学園は2019年に創立100周年を迎える。創立者平生鈆三郎は東京海上保険（現東京海上日動火災保険株式会社）など損害保険業界の近代化に貢献し、川崎造船所を再建した実業界の人であったが、教育に対する情熱を持ち、広田弘毅内閣の文部大臣を務めた。自己の教育理念を実現するために学園を創立した平生は、「世界に通用する人物」を標榜した。今でこそ、「グローバル人材」の育成は時代のキーワードであるが、100年前にこれを重要視していたとは、関係者でなくとも、一個人として頭が下がる。

甲南大学に国際系の学部を設置していないのも平生精神に基づいてのことともいえるだろう。現執行部では長坂悦敬学長のもと、どの学部に入學してもすべての学生が国際教育を受けることができる「融合型グローバル教育」を推進している。国際交流センターが全学の国際交流の窓口になり、国際言語文化センターが外国語教育を担っている。両センターは融合型グローバル教育の原動力になっている。昨年オープンしたグローバル教育の拠点、グローバルゾーンには外国語のみ使用する Language LOFT があり、本学学生と留學生が交流し、留学から帰国した学生と教員が交流を支援している。イベントやアクティビティが毎日開催されているが、2016年度はプログラムをさらに充実、岡本のメインキャンパスのすべての1年生が授業外で Language LOFT を利用する仕組みを始動した。

学生の留学支援に関しては、昨年認定校留学制度が整備され、2016年度には留学の単位が認め

られる提携校は168校に拡大した。米国ウィーバー州立大学との提携では、ダブルディグリーの可能性も検討する。その他、バレンシア大学と提携しディズニーワールドでのインターンシップを開始し、国際ボランティアの導入も検討する。また昨年提携したドイツ ライプツィヒ大学への留学生送り出しと受け入れも予定している。

本稿ではまず本学の国際交流プログラム「Hop! Step! Jump!」について概説し、次に日本学生支援機構の海外留学支援制度に採択された「欧米トップレベル大学との多彩な双方向交流・交換留学プログラム」及び「Asian Students Exchange Program—アジアとの交流を促進する双方向交換留学プログラム」の派遣留学に特化して内容を紹介する。

2. 甲南大学の国際交流プログラム

本学では「Hop! Step! Jump!」と3段階にわけた段階別留学体験プログラムを用意し、留学を実現するための多彩なサポートを展開している。これは留学に対する学生の心理的負担を段階的に低くしていこうという取組で、Hop は学内、グローバルゾーン等で留学生と交流、外国語の学習をしたり、本学学生が留学生をサポートしたり、学内の施設や制度を利用する学内留学を指す。Step はおもに短期留学、Jump は半年以上の長期留学を指す。(図1参照)

甲南大学ではこんなことができる!

HOP *学内国際交流*

- 留学って遠い存在・・・
- 外国からの留学生と交流してみたい
- 長期留学へ行きたいけど、事情があり行けない
- 語学力が心配・・・

STEP *短期留学*

- *エリアスタディーズ*
- *海外語学講座*
- *ジャパNSTAディーズ*
- 海外へ行ったことがないけど行ってみたい!
- 自分で旅行へ行くのではなく大学のプログラムで何か学びたい!

JUMP *長期留学*

- 海外で語学力、人間力を伸ばしたい!
- 海外で専門教育科目を勉強したい!
- 大学4年間で何かをしたい!

図1 甲南大学の国際交流プログラム「Hop! Step! Jump!」

Hop では、本学学生が学内における数々の国際交流プログラムに参加することで、異文化理解を深める。具体的には、留学関連のイベントや留学生との交流会などの「SPRING/ FALL International Week」、留学生が来日する前からメールを交換、来日後は日本での生活をサポートする「Tomodachi プログラム」、留学生とペアになり、言語や文化を教え合い交流する「ランゲージパートナー」などがある。また2015年9月に誕生したグローバルゾーンは、学内国際交流・Hop を実現する場で、世界各地からの留学生が日本語を使用し、本学学生がサポートする「あじさいルーム」、本学学生が外国語を使用し、留学生や教員がサポートする「Language LOFT」、言語のしぼりのない「グローバル・ラーニング commons」の3つのゾーンからなる。学生はカフェのように気軽に立ち寄って、英語でゲームをしたり、ランチを食べたり、コーヒーを飲んだりすることができる。

Language LOFT では留学生はチューターとして、海外留学から帰国した甲南大学生はアシスタントとして、英語でのコミュニケーションの支援をしている。専任教員もイベントを企画し、毎日交代でサポートする。また一部の学生だけでなく、すべての学生が LOFT を活用できるように、ここでの活動を1年生の英語のオーラルコミュニケーションの授業の成績評価に関連付けている。学生は LOFT に来場して、さまざまなアクティビティやイベントに参加して10ポイントを得ると成績の10パーセントに評価される仕組みである。



LOFT でのアクティビティ

Step では「エリアスタディーズ」、「海外外国語講座」、「ジャパNSTAディーズ」を開設している。すべて1年生から参加できるプログラムで、学部・学年によっては卒業必要単位に充てることができる。

「エリアスタディーズ」は、国際理解へのきっかけを掴むことを目的とし、春夏期休暇中に1週間～10日程度、本学の教員が引率して行う。現地事情などについて学習する「事前授業」、企業訪問や現地学生との交流や現地教員による講義を受講する「現地学習」、まとめとして研究発表などを行う「事後授業」の3部構成となっている。2016年度は、韓国、台湾、タイ、シンガポール、米国で実施する。2009年度から2015年度にかけて、エリアスタディーズ参加学生はのべ280人を突破し、そこから長期留学を志すようになったケースも多く、実際44人のエリアスタディーズ参加学生が長期留学に進んでいる。



エリアスタディーズの例（韓国、シンガポール）

「海外外国語講座」は、春夏期休暇中、甲南大学の協定校で2週間から1ヵ月間集中的に外国語を学習する。ホームステイや寮の生活、週末のフィールドトリップなどもあり、外国語のみならず、文化に接することができるプログラムとなっている。

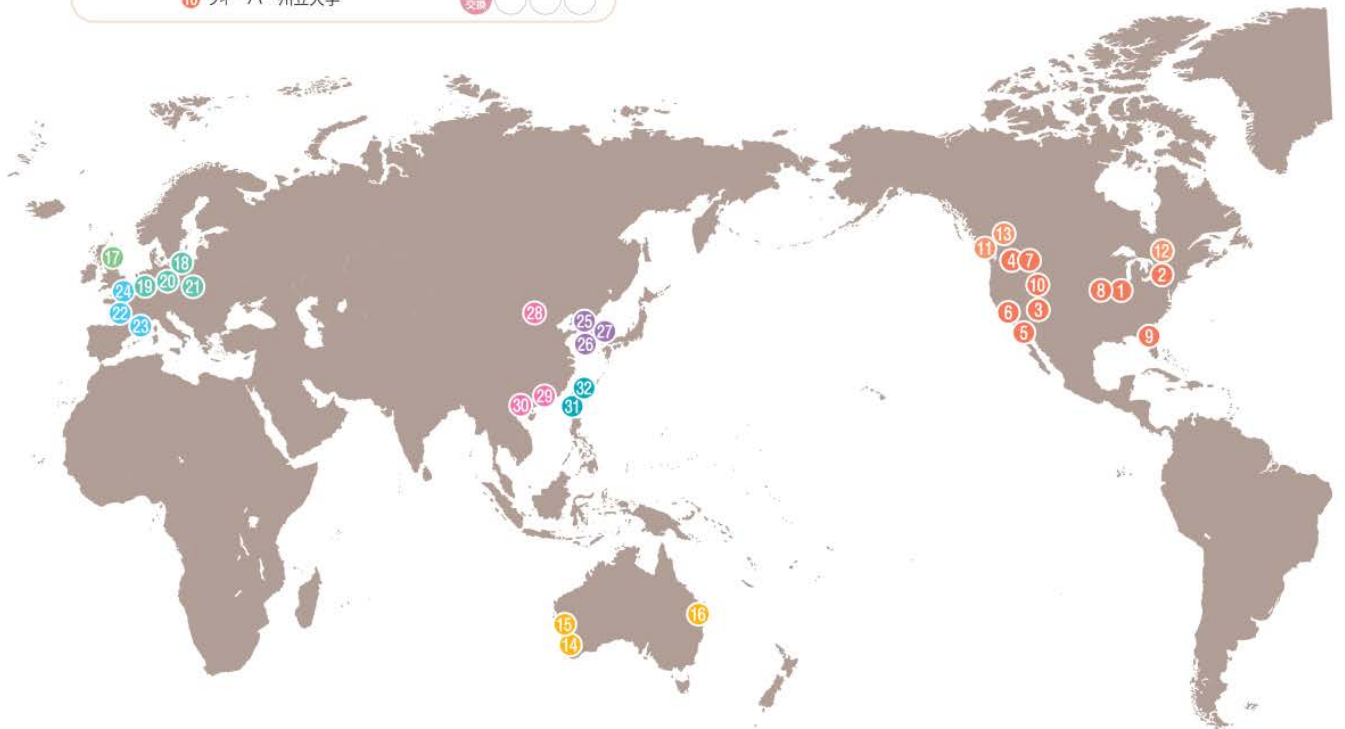
また Step のひとつに「ジャパNSTAディーズ」の参加がある。これは本学で開講されている授業で留学生を対象にしている。日本文学、言語、歴史、経済などをテーマに、すべて英語で実施されるが、一定の外国語基準を満たしていれば本学の学生も聴講や履修をすることができる。

Jump は長期留学プログラムを指す。英語圏だけではなくフランスやドイツ、中国、台湾、韓国といった第2外国語圏への留学もある。具体的には、現地の学生とともに専門教育科目を受講する「交換留学」、主に外国語を集中的に学習する「奨励留学」、「交換留学」と「奨励留学」を組み合わせたような「外国語プラス交換留学」（前半は主に外国語を集中的に学習し、後半は現地学生とともに専門教育科目を受講する）の3種類の制度がある。これらはすべて本学と協定を締結している海外の大学で学ぶものである。図2は本学の協定校のマップで、それぞれ「交換留学」、「語学プラス交換留学」、「奨励留学」、「エリアスタディーズ」「海外外国語講座」の実施状況を示している。

なお2016年度より新しく「認定校留学」という制度がスタートし、長期留学制度が「協定校留学」と「認定校留学」の2種類になった。協定校留学は甲南大学と直接協定を結ぶ海外の大学等へ留学する制度、認定校留学は甲南大学が協定を結んだ日本スタディ・アブロード・ファンデーション(JSAF)を介しての留学または個人での留学となる。いずれも本学の在学期間に算入されるため、4年間での卒業を計画することが可能となっている。甲南大学が直接協定を結んでいない海外の大学へ留学することが可能で、豊富なプログラムから希望に合わせて選ぶことができるようになった。

協定留学先MAP

| | | | | | |
|-------------|------------------------|--------------|----------------|-------------------|--------------|
| アメリカ | 1 イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 | 交換 留学 プラス 海外 | カナダ | 11 ビクトリア大学 | 交換 留学 プラス 海外 |
| | 2 ニューヨーク州立大学バッファロー校 | 交換 留学 プラス | | 12 カールトン大学 | 交換 海外 |
| | 3 スノー・カレッジ | 海外 | | 13 プリティッシュコロンビア大学 | 海外 |
| | 4 セントラルワシントン大学 | 海外 | オーストラリア | 14 マドック大学 | 交換 留学 プラス |
| | 5 カリフォルニア大学サンディエゴ校 | 海外 | | 15 イーデス・コーワン大学 | 交換 留学 プラス |
| | 6 ドミニカン大学 ELSランゲージセンター | 海外 | | 16 クイーンズランド大学 | 海外 |
| | 7 ハイライン・カレッジ | 海外 | イギリス | 17 リーズ大学 | 交換 留学 プラス 海外 |
| | 8 バデュー大学カルメット校 | 交換 海外 | | | |
| | 9 バレンシア・カレッジ | 海外 | | | |
| | 10 ウィーバー州立大学 | 交換 | | | |



| | | | | | |
|-------------|---------------------------|-------|-----------|-----------|--------------|
| ドイツ | 18 ベルリン・フンボルト大学 | 交換 海外 | 韓国 | 25 漢陽大学 | 交換 留学 プラス 海外 |
| | 19 ケルン・ビジネススクール | 交換 | | 26 慶熙大学 | 交換 留学 プラス |
| | 20 ライプツィヒ大学ヘルダー・インスティテュート | 海外 | | 27 東義大学 | 交換 海外 |
| | 21 ゲーテ・インスティテュートドレスデン校 | 海外 | 中国 | 28 北京郵電大学 | 交換 海外 |
| フランス | 22 トゥール大学トゥレーヌ語学院 | 交換 海外 | | 29 廈門大学 | 交換 |
| | 23 リヨン第三大学 | 交換 | | 30 香港浸會大学 | 海外 |
| | 24 ランブイエ国際学院 | 海外 | 台湾 | 31 東海大学 | 交換 留学 プラス 海外 |
| | | | | 32 国立台北大学 | 交換 留学 プラス |

図2 甲南大学の協定校

さてこのように大学をあげて推進している留学、とりわけ長期留学を果たした学生は変わるのだろうか。図3は長期留学した学生を対象に実施したアンケートの一部である。「留学前と留学後で変化がありましたか」と質問したところ、100%が「変化があった」と回答。変化の内容をみると、「視野の広がり」が一番多く23%、「外国語の能力」と「外国・世界への関心」がそれぞれ17%となっている。アンケートの結果からはポジティブな変化が見られる。

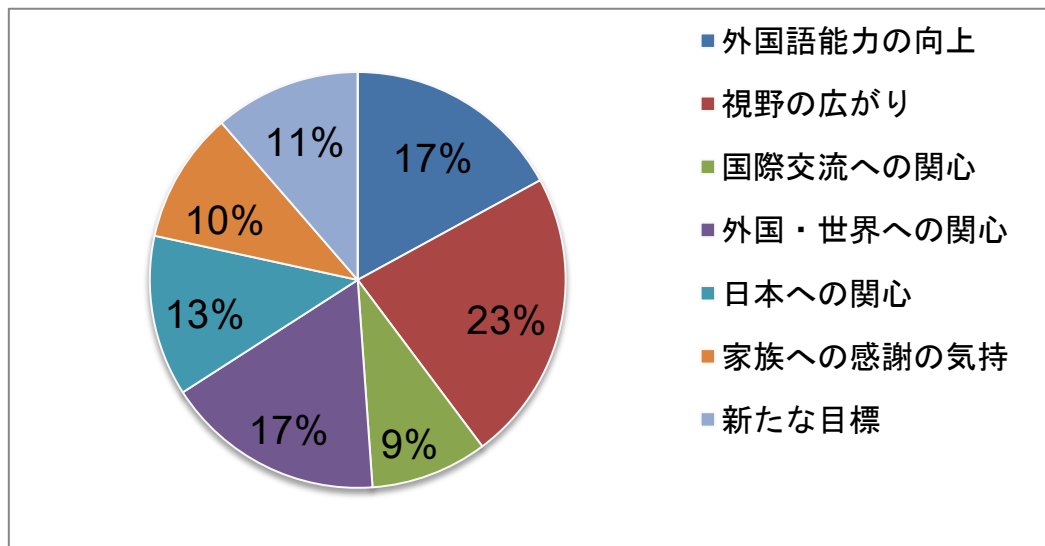


図3 長期留学後の変化（複数回答）

3-1. 欧米トップレベル大学との多彩な双方向交流・交換留学プログラム

この交換プログラムは、アメリカ合衆国、カナダ、英国、ドイツ、フランス、オーストラリアにある本学の協定大学と連携して行っている。協定校に留学することで、同世代の外国学生とのコミュニケーション、寮やホームステイによる共同生活等、様々な異文化体験を通じて多彩な世界観・価値観に触れ、国際的な視野を広げる機会を学生に与えることを目的としている。また、学生本人の外国語能力に応じた外国語科目、専攻や興味に沿った専門教育科目の受講を通して専門知識を現地言語で学ぶこと、授業中でのアカデミックな交流を通して、多様な価値観や世界観を互いに認め合い、諸問題の解決に努めながら、それぞれが未来を切り開いていく力を身につけること、将来的に両国の友好的発展を実現する人材になることを目標としている。

本学から派遣する学生には、協定校と調整を行い、留学期間を双方の大学の学年暦に適した設定にすることで4年の修学期間に組み込むことができるようにしている。また、国際関係や外国語を専攻する学生に特化したプログラムではなく、所属学部開講科目に相当する科目を留学先でも受講できるため、全学部の学生がそれぞれの専攻にあわせて留学先・地域を選定できるようにしている。また、卒業後の進路にも柔軟性をもてるような国際性と外国語能力、専門性を体得できるようにデザインさ

れている。

派遣先協定校では、学生の外国語能力に合わせた学力編成のクラスへの配属が行われ、ランゲージパートナーやチューター制度などそれぞれの大学の特性に合わせた学生への外国語能力向上のためのサポートが実現している。

また、渡航前にも国際言語文化センターで留学のための英語集中コースを基礎教育として提供し、早期から留学に行けるよう学生の外国語能力の向上につとめている。クラス編成は20人までの少人数制で、コミュニケーションメソッドで、学生を中心とした双方向授業を行っている。さらに、外国語学習相談アワー、チューター制度なども整備している。また留学先によっては、開講科目一覧が事前に送付されるほか、留学先大学への出願時にも事前にオンラインで科目登録をするようになっており、国際交流センター担当スタッフがその指導にあたっている。

本学の派遣学生には以下の段階を経るよう説明がなされる。第一段階では、学生は本学キャンパスにおいて国際交流センターが提供する様々な交流プログラム(Hop)に参加し、文化背景の異なる双方向学生交流による相互理解を体得する。第二段階では、事前に学部の指導主任の面談を受け、留学の目的、今後の履修計画を明確にする。第三段階では、各自の外国語レベルや目的にあった留学先で、外国語以外にも専門教育科目を現地言語で受講し、現地学生とともに学ぶ。現地で取得した単位については、帰国後所定の手続きを経て、本学の単位として認定されることになっている。最終段階として、帰国後、本学キャンパスにて欧米圏からの受入留学生のために開講しているジャパニスタディーゼ科目(英語)を受講することで、留学中に学んだ外国語能力を生かし、「Joint Seminar」等を通して、双方向の学生がアカデミックなレベルでの交流を図る。またグローバルゾーンでは、LOFT Assistantとして学生の英語コミュニケーション力を高めるために貢献する。

派遣学生の過去3年の実績は、2013年度が17人、2014年度が22人、2015年度が9人である。

3-2. Asian Students Exchange Program—アジアとの交流を促進する双方向交換留学プログラム

この交換プログラムは、台湾、中国、大韓民国にある本学の協定校と連携して行っている。受入・派遣する学生が国境を越えた友情や絆をはぐくむ過程で、多様な価値観や世界観を互いに認め合い、諸問題の解決に努められるように未来を切り開いていく力を身につけさせることを目的としている。また、双方向の交換留学を通じて、両者の大学での専門教育を現地学生とともに受講し、意見を交換する事、また留学先のキャンパスにおいて同世代の違った国籍や文化の学生との交流を通して、近隣アジア諸国内における相互理解を推進することも目指している。

本学からの留学予定学生に対しては、事前に学部の指導主任と面談し、留学中に学びたいことの確認を行い、単位修得にむけての計画を立てるよう指導している。また3・4年次学生に対しては、留

学経験者で就職活動を終えた先輩学生との交流を通して帰国後の進路を検討する機会を設けている。帰国後、学生は指導主任との面談、キャリアセンターや国際交流センターを通して、留学を通して学んだことが活かせるような将来の進路について具体的な支援を受けられる体制を整備している。

派遣先協定校では学生の外国語能力に合わせた学力編成のクラスへの配属が行われている。また、留学先では、外国語・生活面での相談役となる現地学生がつく「トウミ制度（韓国：漢陽大学、慶熙大学）」、「Buddy Program（台湾：東海大学）」等、各大学の特性に合わせた学生への言語能力向上のための配慮・措置をおこなっている。

また、渡航前にも本学国際言語文化センターが開講する「チューター制度」、「外国語相談アワー」を通して、外国語学習の個別カウンセリングや指導をおこない、現地での留學生活に困らないように外国語学習を徹底している。

本学では、2009年度よりアジア協定校との交流を本格的にスタートさせたが、その後着実な交流を続け、現在ではプログラム開始当初の約5倍の学生が相互に交換留学するに至っている。アジア協定校との交流を深めることで、本学の国際交流は以前にも増して多様化し、大きく幅が広がっている。

4. おわりに

おそらく日本の教育機関で国際交流の必要を感じたり、国際交流の推進を余儀なくされたりしているところは多いだろう。本学もそのうちの一つである。

「国際交流」というと一見華やかな感じがするが、実際はそうでもない。それどころか、文化もことばも違う相手に日々悪戦苦闘するのが現実である。実際、インターネットが地球上を覆いつくし、情報が瞬時に世界を駆け巡る中、異文化の衝突は避けられない。2001年に新たなミレニアムを迎えたとき、これからはより良い世界が築けるのではないかと期待したが、911によってその根拠のない楽観論は打ち砕かれ、その後もテロリズムは世界を凌駕している。この混乱は一時的なもので人類はより賢くなって世界平和が訪れるのか、それともハリウッド映画が繰り返し取り上げるテーマのひとつ、人類は滅亡するのか、またはそのどちらでもない状態が続くのか、私たちは明確な答えを見いだせない。

ただ教育機関に属し、国際交流を担当する者として、時代を担う若者を教育する責務はある。地球上のどの地域に行っても、または日本の国内でも、違う文化の人々と交渉したり、協働したり、共感したりできる人物、おそらくこの教育機関も掲げるキーワードは違っても、そのような人物の育成を目指しているのではないか。

冒頭にも述べたように、本学も100周年に向けて、融合型グローバル教育を推進している。本稿では詳述しなかったが、グローバル教育の推進と同時に、危機管理体制も強化している。また紹介し

たプログラム以外にもさまざまなプログラムに数値目標を設定し、ロードマップを作成し、教職員が協力してその目標を達成しようとしている。すべてがうまくはいかないだろうが、さまざまな試みの中で、日本人・外国人といったカテゴリーに関係なく、本学で学ぶ学生が満足し、達成感を得て、一段と成長して世界に飛び立ってほしいものである。その願いをこめてグローバルゾーン全体の呼称をPorte(フランス語で扉の意味)とした。